



リバタリアン

月
刊

ホームページ
<https://institute-for-libertarian.org>
 メールアドレス
info@institute-for-libertarian.org

発行所 リバタリアン協会
 編集・発行人 前川範行

ノート:リバタリアン思想史1

私は以前から一貫してリバタリアン思想・リバタリアニズムは、左翼思想に起源があると主張しており、この研究ノートは、その説を補強するためのものである。

日本のアカデミズムにおけるリバタリアニズムは、ロバート・ノージックをもって幕開けとみなす傾向がある。これは、政治哲学がジョン・ロールズにより再興され、彼の同僚であるノージックも引き合いに出されることになった副産物である。そのため、「リバタリアニズム=最小国家論」という矮小な決めつけが日本では蔓延することとなり、無政府資本主義やリバタリアン社会主義が歴史のゴミ箱へ掃き捨てられてしまった。このノージック（ロールズ）偏重の世界観に物申すのが私の研究者としての役目の1つである。

さて、従前のような「リバタリアニズム観」が常識となった今では、「リバタリアン思想は左翼起源」という文言に眩暈がすることに疑いはない。「リバタリアニズム=右派的・資本主義的・小さな政府的イデオロギー」という「歴史」を信じる人は、「リベラリズム」という概念が社会的リベラルに強奪されたので、仕方なくリバタリアニズムを使う」とよく嘆くが、その実、右派リバタリアンが左派リバタリアンから歴史を強奪したのだ。これを告発することが私の研究者としての2つ目の役目である。

本稿はあくまでノートであり、論理的に整理されたものではなく、雑多なアイデア・メモであるため、残念なことに、読者の方々に告発のすべてを開示できない。しかし、その一端を示すことにそれなりの役割があると信じて、以下ノートを綴る。

ノージック伝来前に日本に「リバータリアニズム」は存在した

今回は大澤正道(1967)『アナキズム思想史』今泉誠文社、を取り上げる。この本は、アナキズム・アナキストの思想・運動をまとめた、アナキズムの入門書のようなものである。大澤氏(1967: 8-9)はエルツバッハの『無政府主義』での人物本位な分類に異議を唱え、「歴史的な背景や、実践運動との関係、これら[アナキストたちとその思想]の諸説のうちにある有機的な結びつきなどが、かならずしも明らかにされていない」と述べ、19世紀以降のアナキズム運動の歴史を年頭に置いた分類を試みる。やや長い引用だが、非常に重要なので転記すると、

ぼくの考えでは、近代アナキズム理論は大別して二つのグループにわけられ、それぞれリバータリアニズム、アナルコサンジカリズムとして現代に受け継がれているとおもわれる。この二つの

グループの間で、たとえばタッカーとクロボトキンの論争にみられるように、はげしい対立、抗争の行われたこともあったが、こんにちでは一方が絶対的に正しく、他方が全く誤っているというものではなく、それぞれに真理を語っており、それぞれにおぎない合うべきものとされるのがふつうである。

その一つ[リバータリアニズム]は、自主的な能力を養い、国家権力と直接対決するというより、国家権力の外側で民衆の自主的な、自治的な生活態度、組織活動を培養し、あたらしい社会秩序の地ならしをすること、その面に運動の重心をおく理論である。したがって、このグループに特徴的なのは啓蒙的、教育的、建設的な点である(大澤1967: 9)。

と、リバータリアニズムとアナルコサンジカリズムを峻別している。現代のアナキズムの分類では、通常、前者は個人主義的アナキズムと呼ばれ、後者はアナルコ・サンディカリズムと呼ばれる。日本では、前者の代表的な論者として八太舟三、後者には大杉栄が、海外では、前者にベンジャミン・タッカー、後者にミハイル・バクーニンが挙げられる。彼らの思想体系・運動論は大幅に異なる箇所がある——ただし、反国家という点は一致している。

大澤によると、リバータリアニズム・グループの中でも一際啓蒙色が強い論者に、ゴドウィン、ソロー、シュティルナー、トルストイ、石川三四郎らを挙げている。大澤のいう啓蒙的とは「主として考え方の変革、生活の仕方の改革こそ、まず第一の仕事であるという前提の下に、民衆に思想宣伝を行うこと」であり、教育運動とは「啓蒙と密接につながっているが、啓蒙よりさらに具体的、実践的な面がつよい」とし、建設的とはロバート・オーウェンらの共同体の実験[ニュー・ハーモニーのこと]やブルードンの人民銀行を例に挙げた上で「国家権力の外側に自主的な、共同的な組織を作ってゆくという方法」としている(大澤1967: 10-11)。現代的には、思想家が啓蒙を、シンクタンクと活動家が教育を、活動家と企業家が実践を行うといったところだろうか。

なお、もう一方のアナキズムはバクーニンのようなものであり、「すべての悪の大本は国家権力にあり、その一掃なしに、新しい社会は考えられない、国家権力が打倒されれば、民衆はすぐにでもアナキズム社会を実現しうる、と主張する。それゆえ、この派は行動的、破壊的な面がつよい。一般におそれられ、こわいもののようにみられていたのは、主としてこの派の人たちである(大澤1967: 11)」と述べているように、一般に流布したアナキズムのイメージに沿うものだ。ここでは、教育を重視するリバータリアニズムと、(破壊的な)行動を重視するアナルコサンジカリズムと理解すればよい。

また、大澤(1967: 15)はアナルコサンジカリズムとリバータリアニズムの関係について、

- 目次
- 1 ノート:リバタリアン思想史1 (前川範行)
 - 2 訳 「左派リバタリアニズムの過去、現在、展望」
(Roderick Long, 訳: 阿奈城なき)
 - 4 訳 「コンキンとのインタビュー」3 (SEK3, 訳: 前川範行)
 - 7 訳 「国家社会主義とアナキズム」(B.Tucker, 訳: 中条やばみ)

アナルコサンジカリズムとならび立つリバータリアニズムは、きわめてひろい思潮を代表している。こんにち、この言葉はオーソリタリアニズム（権威主義）に対するものとして使われており、旧式なリベラリズムよりさらに急進的、本質的な自由の哲学であることをめざしている。

いわゆるオールド・リベラリズムが資本主義と代議政治の思想上の表現であったように、リバータリアニズムはアナルコサンジカリズムを内側から支え、その真理であることを論証する哲学といえよう。逆にいえば、リバータリアニズムの政治経済的な理論が、アナルコサンジカリズムなのである。

と述べている。大澤の理解によると、リバータリアニズムとはアナキズムの哲学的側面であり、アナルコサンジカリズムは活動的側面のようなのだ。

つまるところ、大澤のリバータリアニズムは、①個人主義的アナキズムとその意味するところはほぼ同じものであり、②権威主義に反する思想であり、③アナキズムの哲学的側面である、と言えよう。

簡単に、大澤の理解を現代のリバタリアニズム研究に当てはめてみようと思う。前述のように、今日のリバタリアニズム研究は右派リバタリアンの独壇場であり、左派的・アナキズム的側面がクローズアップされることは——ヒレル・スタイナー的左派リバタリアニズムを除き——まずない。それは、アカデミズムにおいて理論的関心に乏しいだけではなく、歴史的関心の忘却でもある。リバタリアン思想は純然たる右派思想とは言い難い。あの無政府資本主義者のマレー・ロスバードですら、（現実世界において）大資本家には反対であったし、オーストリア学派経済学を受容したサミュエル・エドワード・コンキン3世は賃労働を批判した。思想的に混濁としたこのような状況では、一度、リバタリアン思想の原点（左派的・アナキズム的側面）に立ち返り、リバタリアン思想が持つ「コア」を探求する必要があるだろう。大澤のリバータリアニズム理解は、上記のような歴史の忘却の拒絶と、「コア」への接近において、有用であると言えるだろう。

最後に、今後の研究のために、問いをいくつか記しておこう。①なぜ、そしていつ、リバータリアニズムの語は、個人主義的無政府主義を意味するものから、右派リバタリアニズムへと変容したのか。②リバータリアニズムの訳語にどのような理由があるのか。③これよりも前の時代に日本でリバ（一）タリアニズムの語は使用されていたのか。①は私の研究者人生の続くうちに解明したい重要な問いである。常識的には、アメリカの個人主義的無政府主義者のエッセンスがオールド・ライトに受け継がれたと考えるのが自然だろうが、そうだと断定するには証拠が少ない。②は libertarianism をカタカナでそのまま転写していることに関してである。思い切って日本語（漢字）に訳さない・訳せないには、それなりの理由がある。そもそも libertarian が何を指す概念であるか曖昧なのがそれだろう。私は、リバタリアン思想を理解することは、リバタリアン概念史・運動史を理解することだと考えている。歴史的営為を排除した理論研究だけでは、曖昧な概念が持つ意味を理解し、訳を生み出すことは難しいだろう。③は引き続き調査する予定だ。

（前川範行）

文献

大澤正道(1967)『アナキズム思想史』現代思潮社。

訳 左派リバタリアニズムの過去、現在、展望

ロ德里ック・ロング

阿奈城なき訳

~~~~~

[編集註]

本稿は Center for Stateless Society (C4SS) 掲載の "Left-Libertarianism: Its Past, Its Present, Its Prospects" <https://c4ss.org/content/28323> の翻訳である。

~~~~~

本稿（原題：Left-Libertarianism: Its Past, Its Present, Its Prospects）は、2014年9月8日から10日にかけて英国・マンチェスターで開催されたMANCEPT 2014でのワークショップ「リバタリアン哲学の現状（The Current State of Libertarian Philosophy）」の発表のために受理された論文の要旨／プロポーザルである。

* * *

ここ十年で、一般に「左派リバタリアニズム」と呼ばれる思想形態がリバタリアン界隈でますます目立つようになり、また議論されるようになってきており、実際に激しい批判を呼んでいる [1]。この左派リバタリアニズムの形態を、自己所有権（リバタリアンの側面）と自然資源の共有権（「左派」の側面）を組み合わせたピーター・ヴァレンタイン、ヒレル・スタイナー、マイケル・オーツカと関連づけた左派リバタリアニズムの立場と混同してはならない。より広範なリバタリアン運動のなかでは、「左派リバタリアニズム」は通常、ヴァレンタイン＝スタイナー＝オーツカの立場を指すのではなく、a) 自由化された市場 [i]、私有財産、自由放任主義(レッセフェール)へのラディカルな——ほとんどの場合、実際には無政府主義的(アナーキスティック)な——コミットメント、b) 階級分析を志向して、階級性の強い職場、企業の支配、甚だしい経済的不平等は、国家統制主義と同類のものであり、また国家統制主義によって（特に、有利な企業が規模の経済の便益を享受でき、規模の不経済の費用を社会に負担させることの可能な規制によって）広くなされる悪であるとして否定し、水平的な組織と労働者の自己管理を支持するもの、c) 家父長制と女性嫌悪(ミソジニー)、白人至上主義、異性愛規範と同性愛嫌悪(ホモフォビア)、シスセクシズム [ii]、健常者優位主義(エイブリズム)といった社会的な特権の諸形態は、これもまた国家統制主義と同類のものであり、そして国家統制主義と互助関係にある悪であるとして闘うことへの関心、を組み合わせた運動のことを言う。軍国主義やナショナリズムへの反対、環境主義や国境開放の支持もまたその一部である。

この運動は、自らの左派リバタリアンという標語を、ヴァレンタインらが用いる比較的最近の言い方からではなく、ロイ・チャイルズ、カール・ヘス、マレー・ロスバード、カール・オグルスビー、サミュエル・コンキンといった人物の活動を通じて1960年代から70年代にかけて起こった自由市場リバタリアニズムと新左翼の間でのほんの束の和解から生じた「リバタリアン左派」から取っている。しかし、そのルーツは1960年代から70年代の左派リバタリアニズムにあるものの、目下の形態での左派リバタリアニズムは、ケヴィン・A・カーソン [2]、ゲイリー・シャルティエ [3]、チャールズ・W・ジョンソン [4] などの文筆家が貢献して現在の特色ある形となり、代表的なものとしてはリバタリアン左派連合 (Alliance of the Libertarian Left) や無国籍社会センター (Center for a Stateless Society) といった組織のほか、Rad Geek People's Daily、Invisible Molotovのようなウェブサイトがある。

今日の左派リバタリアンは、一方では社会的アナーキストから、他方ではアナルコ・キャピタリストから着想を得ている（ただし、これら2つの着想の源となる立場はそれぞれ、左派リバタリアニズム

は自らの隠れ蓑であるとして斥けるきらいがある)。しかし、左派リバタリアンは、スティーヴン・パール・アンドリュース、ヴォルテリン・デ・クレイア、ウィリアム・B・グリーン、エズラ・ヘイトウッド、トーマス・ホジスキ、ライサンダー・スプナー、ベンジャミン・タッカー、ジョサイア・ウォーレンといった19世紀の個人主義的アナキストの自由市場支持、反資本主義、反特権の立場に最も近い。(これらの思想家の多くは、自由市場に傾倒したにもかかわらず、資本主義的な特権に反対するため、自らは「社会主義者」であると考えていた。アンドリュース、グリーン、スプナー、ウォーレンに関しては、マルクス主義者が御しがたいこれらの個人主義者をすべて追い出す以前は第一インターナショナルのアメリカ支部のメンバーでさえあった)。さらには、クリス・マシュー・シャバラ [5] からインスピレーションを受けている。シャバラの研究は、カール・マルクス、フリードリヒ・ハイエク、アイン・ランドという思いがけない3人組の間の親和性をつきとめ、政治的・経済的・文化的な現象の間にある体系立った弁証法的なつながりが重要であると強調している。ただし、シャバラの左翼思想とリバタリアニズムは、いずれも左派リバタリアンから支持されている見解よりも傾向としては穏健である。

左派リバタリアニズムをブリーディング・ハート・リバタリアニズム (BHL) [iii] と混同すべきでない。BHLとして、リバタリアニズムの自由市場へのコミットメントと左派の社会正義への関心との融合を表す限りでは、左派リバタリアニズムはBHLの部分集合とみなされるかもしれない。しかし、左派リバタリアンは、左翼思想においてもリバタリアニズムにおいても、BHL支持者を自認する人々の大多数よりもラディカルな傾向がある。(著名なBHLブログの主要な投稿者15人のうち、ここで議論している意味での左派リバタリアンは2人だけだ [iv]。) 大半のBHL支持者は、リバタリアンへのコミットメントと左翼へのコミットメントを、少なくともある程度は互いに穏健にさせ合うものと考えているようなのだ。それに対して、左派リバタリアンは、リバタリアンへのコミットメントと左翼へのコミットメントを、主として互いに強め合うものと考えがちである。

例えば、多くのBHL支持者は最低所得保障法を支持することでリバタリアニズムを穏健にしているが、左派リバタリアンはそうした法律を支配階級が貧困層に規律を課すための道具とみなす傾向がある [6]。同様に、多くのBHL支持者は貧困にあえぐ労働者にとって「一番マシな選択肢」である搾取工場を擁護することで左翼思想を穏健にしているのに対し、左派リバタリアンは搾取工場を禁止することが労働者を害するという点ではBHLに同意するものの、搾取工場を称揚するのではなく、むしろ貧困にあえぐ労働者から搾取工場よりも良い選択肢を制度的に奪う社会的・政治的な構造を弱体化させようと努めるだろう。左派リバタリアンは、既存の経済制度が政府の介入によって不平等と特権の方向に大きく歪んでいるとみる性向が、BHL支持者の多数派よりも強い。関連して、左派リバタリアンは労働運動や労働組合をより強く支持する傾向がある。また、ほとんどのBHL支持者は政治的プロセスを通じた制度改革を支持しているが、左派リバタリアンはロビイングや選挙政治を重視せず、草の根の組織化を支持する傾向がある。BHLの主要な目的がハイエクとロールズの融合であるとするれば、左派リバタリアンの主要な目的はマレー・ロスバードとデヴィッド・グレーバーの融合であると言えるかもしれない。

左派リバタリアニズムとしばしば関連づけられる概念に「厚いリバタリアニズム」 [7] というものがある。これは、リバタリアンの諸原則が論理的に含意するものではないが、それでも妥当なリバタリアンの主張の一部となるような形で概念的あるいは因果的にリバタリアンの諸原則と深く関わっているような特定の価値へのコミットメントがあるという考え方だ。例えば、これらの付加的なコミットメントのなかには、リバタリアニズムの最も妥当な弁論の一部であったり、それによって示唆されたりするものもあれば、リバタリアニズムの諸原則を適用する代替的な方法を選択するため、もしくは

はリバタリアン的な社会秩序を実現可能なものにしたたり持続可能なものにしたたりするために必要なものもある。以上のことは、ほとんどの厚いリバタリアニズム支持者にとって、こうしたコミットメントを拒否する人々をリバタリアンとはみなしていないということの意味するわけではなく、そうした人々のリバタリアニズムが完全には実現されていないことを意味している。

厚いリバタリアニズムは左派リバタリアニズムと入れ替えることができない。というのも、リバタリアニズムを実装するためには、例えば階級的に上位にある人々への服従という社会秩序が必要だと考える人々(そう、そのようなリバタリアンは存在するのだ!)は、厚いリバタリアンだが左派リバタリアンではないだろうから。しかし、ほとんどの左派リバタリアンは、フェミニズム、反レイシズム、労働者ラディカリズムといった「左翼」の価値観は、概念的にも因果的にもリバタリアンの原則と密接な関係にあるとみなしているのである。

この論文では、左派リバタリアニズムの起源をたどり、運動内部における現在地を述べ、そのアプローチが、左派でないリバタリアニズムやリバタリアンでない左翼思想よりも(厚みにおいて)優れていることを論じる。

(訳: 阿奈城なき)

原註

[1] より広範なリバタリアン運動のなかでの左派リバタリアニズムへの批判の例——丁重で思慮深いものもあれば、激しく敵対するものもある——については以下を参照。

http://mises.org/journals/jls/20_1/20_1_5.pdf

http://mises.org/journals/jls/22_1/22_1_8.pdf

<http://www.lewrockwell.com/2014/05/dan-sanchez/the-perils-of-thick-thinking>

<http://therightstuff.biz/2013/09/09/exercises-in-degeneration-the-c4ss-experience>

<http://www.christophercantwell.com/2014/03/18/left-libertarians-worse-racists>

[2] *Studies in Mutualist Political Economy*, 2nd ed. (BookSurge, 2007); *Organization Theory: A Libertarian Perspective* (BookSurge, 2008); *The Homebrew Industrial Revolution: A Low-Overhead Manifesto* (BookSurge, 2010).

[3] *The Conscience of an Anarchist: Why It's Time to Say Good-Bye to the State and Build a Free Society* (Cobden Press, 2011); *Anarchy and Legal Order: Law and Politics for a Stateless Society* (Cambridge, 2012); *Radicalizing Rawls: Global Justice and the Foundations of International Law* (Palgrave Macmillan, 2014); ed., with Charles W. Johnson, *Markets Not Capitalism: Individualist Anarchism Against Bosses, Inequality, Corporate Power, and Structural Poverty* (Minor Compositions, 2011).

[4] "Liberty, Equality, Solidarity: Toward a Dialectical Anarchism," in Roderick T. Long and Tibor R. Machan, eds., *Anarchism/Minarchism: Is a Government Part of a Free Country?* (Ashgate, 2008), pp 155-288; cf. his co-edited volume *Markets Not Capitalism* in the previous note.

[5] *Marx, Hayek, and Utopia* (State University of New York Press, 1995); *Total Freedom: Toward a Dialectical Libertarianism* (Penn State University Press, 2000); *Ayn Rand: The Russian Radical*, 2nd ed. (Penn State University Press, 2013).

[6] 例えば、<http://c4ss.org/content/25618>を参照。

[7] この句の典拠については、http://radgeek.com/gt/2008/10/03/libertarianism_throughを参照。

訳註

[i] ウィリアム・ギリスは、「自由市場 (free market)」という表現はそれが既存のものであるかのように聞こえるために、コーポラティズムや資本の不当な蓄積が個人間の自由な結びつきと競争の自然な結果であるという作り話が受け入れられてしまうと指摘し、代わりに「自由化された市場 (a freed market)」と言うことを提唱している。(William Gillis, The Freed Market, 2007 (<http://www.panarchy.org/gillis/freedmarket.html>))

[ii] ジュリア・セラノによる定義では、シスセクシズム (cissexism) とは「トランスジェンダーの人々の性自認や性表現を、(トランスでない) シスジェンダーの人々の性自認や性表現よりも正当でないとみなす性差別の諸形態」のことである。(Julia Serano, Excluded: Making Feminist and Queer Movements More Inclusive (Seal Press, 2013), 45.)

[iii] マット・ズウォリンスキーは、BHLを「不正義を矯め、慈善行為に携わり、相互扶助をはぐくみ、自由市場が栄えるよう促すことによって経済的に不利な状況にある人々のニーズにこたえることは、実際問題としても道徳的に考えても重要であると信じるリバタリアン」としつつも、BHLとは何かについてはBHLブログへの投稿者の間でも「現実的で本質的な意見の相違がある」とし、BHLは「練り上げられた教義というより研究プログラム」であると述べている。

(Matt Zwolinski, About us, 2011 (<https://bleedingheartlibertarians.com/about-us/>); Matt Zwolinski, Bleeding Heart Libertarianism, 2011 (<https://bleedingheartlibertarians.com/2011/03/bleeding-heart-libertarianism/>))

[iv] 2023年7月現在、BHLブログの主要な投稿者は17人である。

訳 コンキンとのインタビュー 3

理論から実践へ…

Q: 60年代から70年代の間、多くのリバタリアンが急進左派の集団と共闘し、カール・ヘス (63)はブラック・パンサー(64)と民主社会のための学生運動[SDS]のメンバーで、ロスバードはニューヨークの両翼アナキスト・サパー[夕食]・クラブでマレー・ブクチン(65)と共闘しました。このような人々の接触は見事に早々に崩壊しました。なぜですか？

SEK3: 非常にことなるケースだね。ロスバードとブクチンは新規の青年の取り合いのために不和になったが、二人はイデオロギー的な違いを際立たせた。ブラックパンサーとSDSは基本的にヘスを残して崩壊したが、ヘスは1969年の大会後も左翼と協力関係であり続け、彼の逝去まで政策研究所 (IPS) (66)に所属していた。だが、1980年代後半に、彼は自身のリバタリアン Libertarian のつてに戻り、(ロスバード、ルフェーブル、ダグ・ケイシー(67)、ジョン・パグスリー(68)、ロバート・ケファート(69)と共に) アゴリスト研究所の理事会の創立者として、1985年に彼を招待した。後に、彼はリバタリアン党の全国新聞の編集者として勤め、(残念ながら)十分に保守派になり、彼が大病をするまで続いた。

Q: 自身をリバタリアン Libertarians と述べる人々は、左翼との関わりを持とうとしません。左翼はリバタリアンを相手にしようとしません。あなたの組織が左派リバタリアンの運動 Libertarian Left of Movement とみなすアイデアをどこで得たのでしょうか？

SEK3: ロスバードは以下のことを決意した。(本来のリバタリアン党の急進派で、新リバタリアン連合 [New Libertarian Allinace, NLA] としてリバタリアン党を抜け、カウンター・エコノミーの構築のために即刻地下へ向かった) 我々が、マルクス主義の用語を用い

て、極左冒険主義と左翼セクト主義だということだ。彼に親しい人は私を運動 Movement のトロツキーだと言った。その文脈で、リバタリアン左派として我々に言及することが、自然だったからだ。

2つ目に、我々は反原子力、そして反戦的新左翼とのロスバードの1960-1969年連合を続けることに関心があった。我々が再び合法的に存在感を示そうと決めたとき、その連合の残存者に訴えるラベルを用いることは道理にかなっていた。

3つ目に、非政治的活動に回帰するよう強要されたと感じるような、成功を収めたカウンター・エコノミックな企業を構築したメンバーを我々は必要としなかった。非アゴリストと彼ら自身の協力を墮落させることを厭わない異なる集団であることは明らかだからだ。

最後に、私はヨーロッパ、オーストラリア、アジアの政治を数年間目を通していて、1978年に、私はフランスである集団に魅了された。

アメリカの政治連合と異なり、フランスでは、2つの大きな議会連合があったことを思い出すと、それらは非常にイデオロギー的だった。しかし、左翼と中道右派の連合の中に、急進派として知られるフランスのかつての支配政党の構成員たちがいた。連合が古きレッセ・フェールの自由を主張が優勢でないにもかかわらず、彼らは概ね経済に対して自由市場的主張をしていた。急進党(70)は完全に、ド・ゴール主義者(71)とジスカル・デスタン(72)の独立共和党(73)の連合であり続けたが、「左翼」は分裂しており、「左翼の急進派運動 Mouvement des radicaux de gauche, or MRG」として左翼連合(74)に加入した。私はその響きと意味が好きだったので、英文法に多少お辞儀をして、我々の新たな合法活動家集団は、中央アメリカの切迫した戦争を戦う「古い」新左翼の集団に加わるために、左派リバタリアン運動 Movement of Libertarian Left, MLL (75)になった。

Q: 左派リバタリアン/アゴリズムと無政府資本主義の主たる違いはなんですか？

SEK3: 理論的観点、戦略的観点、左翼的専門用語、右翼用語等に注目すると、いくつかの違いがあるが、公平な質問だね。

理論的に、自身を無政府資本主義者(客観主義から脱退した、ジャレット・ウルステイン(76)が、1968年に作り出したと、私は思う)と呼ぶ人々は、徹底的にアゴリストと異なるわけではない。両者はアナーキーを望むと主張する(非国家性、そして、ランドから借用され、ロスバードに強化された、正当化された強制の独占としての国家の定義に我々はとても同意した。)しかし、我々がイデオロギーを現実世界(マルクスに影響を受けた者曰く「実際に存在する資本主義(77)」)に適用するとき、我々はいくつかの点で即座に分裂する。

1つ目かつ最も重要なことだが、アゴリストは企業家を強調し、非国家主義的資本家(イデオロギー的に自覚している必要はなく、資本の所有者の意味)を、比較的、中立的であくせく働かない非イノベーターとして見ており、また親国家的資本家を政治体制における中心的な邪悪として見る。したがって、彼らが誤解され、混同されると我々が考えるときでさえ、我々の「陰謀論」に対する熱意ある展望が掻き立てられる。労働者と農民はどうかと言えば、我々はせいぜい前時代からの厄介な遺風を彼らに見出し、彼らが欠乏した市場の需要によって消滅するとされる日を期待する(したがって、私のフレーズでは、マルクスに影響を受けた人をわざとからかうと、「プロレタリアートの清算。」)ある者は低俗なフレーズでそれを要約できる。「もし国家が1世紀後に廃止されるなら、小惑星でロボットと別荘を持つだろう。」

「無政府資本主義者」は、イノベーター(企業家)と資本家をごちゃ混ぜにする傾向があり、マルクスに影響を受けた人と粗野な衆参主義者もそうである。(特にヨーロッパでのオーストリア学派経済学者の漸進的な勝利が、少なくとも我々の主張を深刻に受け止め

る何人かの新左翼を誘導していた。その主張は、資本家と企業家が、異なる分析を要する非常に異なる階級であり、異なる階級を生み出す（資本家と企業家の観点による）問題に取り組むよう試みる、というものだ。）

アゴリストは厳格なロスバード主義者であり、私はこのケースにおいて、ロスバード以上にロスバード主義者がロスバードの考えに関していくらかの古い混乱がある、と私は主張するだろう。だが、彼はミーゼスの教えに忠実で、ミーゼスはイノベーター/鞆取り商人と資本保有者（モーゲージ保有者、クーポン集めをする儉約家、無価値な相続人(78)、地主等)間の独創的な区分を作った。市場が大きくネットに移行するにつれて、ますます純粋な企業家精神を宿し、実店舗の「所有者」に勝るようになる。

しかし、アゴリストが最も激しく「無政府資本主義者」と異なるのは、現代政治と現代防衛の対処についてだ。無資 A-caps [無政府資本主義者の略語]（彼らは個人で差異が多くある）は、通常、（リバタリアン、共和主義者、カナダ新民主党のような民主主義者や社会主義者(79)でさえ）今ある政党との関与があると信じており、極端なケースでは、共産主義と戦うためにペンタゴンとアメリカ国防総省の複合体を支持する。（彼らの言い訳は何だろうか？）国家を多少なりとも廃止するまでだそう。君が疑いなく取り上げるように、アゴリストは革命的だ。我々は国家とその支配階級の崩壊なしに市場が勝利するとは考えず、私が『新リバタリアン宣言』で指摘したように、歴史的に、通常彼ら自身を擁護する平和革命に対する無分別な暴力を解き放つことなしに彼らは諦めない。

Q: MLLのマニフェストはパンフレットの『新リバタリアン宣言 [NLM]』でした。どんな反応がありましたか？

SEK3: 厳密に言えば、NLMは新リバタリアン連合のマニフェストであって、MLLのマニフェストではない。それは1975年に発刊されたことになっている。しかし、第一版が発刊されるまでに、MLLは組織化されていた。MLLの言及を含み、同じく、広報をしたためだ。

NLMは驚くべき反応があった。第一刷は1000部印刷され、ヴィクター・コーマン(80)は、滑らかな黒いカバーと金箔レタリングが施された「デラックス」版の印刷を企てた。第二刷1500部は、私とヴィクターの分の10部を除いて、すぐに売り切れた。ハードコアで最も純粋なパンフレットは、経費削減のために高密度に植字されており（本当に小さな本で、印刷費を削減するために小さくて行間が少ない活字を用いた）、非常にイデオロギー的に埋没していた当時のリバタリアン活動家たちだけに向けられたため、大変限られた市場向けで、地下のベストセラーになった。それは議会図書館に登録されることはなく、地上に言及されることさえなかった。レッセ・フェール・ブックスはそれを取り扱うのを拒んだ。トロント、そしてもちろん、ロンドンのクリス・タームのオルタナティブ・ブックス(81)にあるような海外のリバタリアン書店だけが取り扱った。最終的に、レッセ・フェールとサンフランシスコのフリーダム・フォーラム・ブックスがこっそりと売るようになった。

マレー・ロスバードは即刻、NLMに対する批判的返答を書くのに同意し、ロバート・ルフェーブルは概ね称賛的な返答を書いた。私は、今は無名の「不潔なピエール」ことアーウィン・シュトラウス(82)が、急進的ではないとして、それを批判したのを見つけ、新しいジャーナルである「新リバタリアン連合の戦略 Strategy of New Libertarian Alliance (略称SNLA)」第1号に私の反駁とともに、まとめた。それも大変売れた。我々はいまだに放置されたSNLAの第2号をいくつか持っているが、SNLAは1995年に「アゴリスト・クォーターリー」に吸収された。

Q: そのテキストで、あなたは、カウンター・エコノミクスがリバタリアニズムに適合し、政府と戦うのに効率のよい唯一の手段だと提案しました。カウンター・エコノミクスについて、詳しく聞かせて

もらえますか？

SEK3: 後でカウンター・エコノミーの「インフラ」と呼ばれるもの活発に構築し、促進する意味においてのカウンター・エコノミクスは、リバタリアン社会 Libertarian Society の成就を保証する唯一の戦略だ。市場が国家の統制下から移行するにつれて、自由社会はそれに応じて発達する。ある点では、市場の多くが国家の制約を受けず、また、私が完全に自由だと思うのは、国家の司法と強制力を含む、何らかの国家の統制の形態への従属がないことで、最も成功した寄生的な社会的存在は、最終的に栄養失調によって消え去るだろう。当然、すべての国家の崩壊が進むにつれて、最終段階で国家が自身を守るべくまとまりのない暴力を伴って無茶なことを行い、アゴリストの盛大な自己防衛が最後の革命となるだろう。

Q: 「NLM」の出版から20年経ちましたが、その目標の達成にさらに近づいたと、あなたは考えていますか？

SEK3: カウンター・エコノミーは西洋社会中で発達し、国家主義的なホワイト・マーケット(83)は、それ自体の機能しない規制や、創造性を台無しにする税略奪で、縮小し、窒息する。レーガンの新保守主義がどんな不合理な名声を得たとしても、東洋では、左翼 nale vo がソビエト国家を打倒した。つまり、限られた理解だと、ほぼ無意識のアゴリズムにもかかわらず、人々に知られている最悪の専制を人々自身が打倒した。しかし、変遷の意識的自覚は成長している。国家がいまだにそれを攻撃しているようなただ一つの武器は、カウンター・エコノミクスに参加するほとんどの人々がそれを罪だと感じることで、まるで彼らが何か悪いものだと感じ、まるで組織的アウトローのギャングが道徳的に優れているかのようだ。これはアイン・ランドが見事に犠牲者の制裁と理解し、呼称した理由だ。自由に地上で語ることでできる間、リバタリアン Libertarian 活動家の任務は、大衆に対してもっともらしく立証することで、特に、インターネットという自由市場アナキストの楽園に繋がったグローバル規模の経済の中で大衆を焚きつける若者に対してだ。また、インターネットは、経済活動の抵抗と不服従が最も道徳的で可能な人間行為であるような場所だ。ウェブサイトだけではなく、芸術、SF小説と今では映画、演劇、そして家庭用コンピューターテクノロジーと容易に理解可能な機器から生まれている新たな形態も含まれる。

Q: 近頃、多くのリバタリアンは自由国家財団(84)に進められた新しい戦略を辿ります。彼らは土台からリバタリアン国家を建国したりしました。サイファーパンクはインターネットと暗号文にそのような希望がある。これら自由の達成方法についてどう思いますか？

SEK3: サイファーパンクはカウンター・エコノミーに便利な道具/武器を与えるが、エコノミーにはそれ以上のものがある。自由のための単一の進歩がアナキストのアゴラを達成することはないが、どれも放棄し、軽んじられるべきではない。ケント・ハスティングス Kent Hastings は以下のことを指摘している。ナノテクノロジーの価値、スペクトル拡散無線、そして小さく無人の空飛ぶ乗り物（用語を失念した）は、ネットプライバシーと、カウンター・エコノミックなインフラの目覚ましい拡大を結びつけた、と。

私は「自由国家 free country」活動家に反抗しないが、彼らは、国家がその伝統的な大量破壊兵器を用いて破壊するための簡単な目標をまさに設定しているだけだと思う。彼らは、自身を守る計画のすべてに関する道徳的抑制の確実な水準を有する国家に依存するが、私は彼らが間違っていると思う。そんなものはない。機能的な自由社会の可視的な指針を粉砕するなら、多少の悪評をもろともせず、数百万の臣民を快く犠牲にするだろう。私はこれら、今日の国家主義的環境の自由国家建国の試みをアナナルコ・シオニズムと呼ぶ。「約束された溪谷を求めて。」

Q: 長期間活動家として、あなたは急進的な若い世代の活動に従事したと、私は確信しています。リバタリアン Libertarian 思想がシアトルやプラハのデモ参加者を獲得する機会があると考えていますか？

SEK3: 私は2000年に、ロサンゼルス（後にシアトル、ワシントン、プラハ等）で反アゴリストなアナキストたちに伝道するよりも多く聞いたが、ブラック・ブロック(85)を含む彼らの心は正しい場所にあった。彼らは、超フェミニズム化と他の罪悪感を通じた、旧左翼的アパラチキ(86)に利用されていた。かつてアナキストだったジェロ・ピアフラ(87)が[2000年の]大統領選でラルフ・ネーダー(88)の支持を呼びかけたとき、私は「大統領候補なし(89)」を呼びかけ、ブラック・ブロックのキッズたちと直ちに、かつ熱烈に結束した。彼らは「リバタリアン libertarian」政党政支持者よりも、大統領候補を支持するアナキストの矛盾を、混乱なく、理解していた。

[以下はPDF下部に記載されていた文言]

著作権は9つの単語で、もしあなたの雑誌やウェブサイトでのインタビューを使用したいなら、そうしてください。

(訳: 前川範行)

(63)Karl Hess は、アメリカのリバタリアン、活動家、ライター。大統領候補バリー・ゴールドウォーターのスピーチライターを経た後、主著 *Dear America* を書いた。また、ロスバードと共に、Libertarian Forum を立ち上げ、ワシントン編集者として従事した。

(64)Black Panthers は、1960年代から1970年代アメリカに存在した政治組織。黒人の解放を目的としていた。

(65)Murray Bookchin は、アメリカのアナキスト。リバタリアン自治体主義 Libertarian Municipalism の提唱者。

(66)Institute for Policy Studies は、1963年に設立された、アメリカのシンクタンク。公民権運動、反戦運動、女性運動、環境運動等に尽力した。

(67)Douglas Robert Casey はアメリカの無政府資本主義者。ケイシー研究所 Casey Research の設立者兼議長。

(68)John Pugsley はアメリカの主意主義的 voluntaryist リバタリアン。出版社 Common Sense Press を設立し、『コモンセンス・エコノミー Common Sense Economy』を出版した。

(69)Robert Kephart は、アメリカのリバタリアン。出版社、ケファート・コミュニケーションズ Kephart Communications, Inc. (KCI) を設立した。多くのリバタリアン組織と運動を支援した。

(70)Parti radical は、1901年設立のフランスの政党。1972年の分裂までは共和党とも呼ばれ、分裂後はヴァロワ急進党とも呼ばれる。当初は左派だったが、徐々に中道化・右傾化した。

(71)Charles André Joseph Marie de Gaulle は、フランス第18代大統領。ド・ゴール主義は、英米から脱却したフランスの独立性を追求する思想を指すことがある。

(72)Valéry Marie René Georges Giscard d'Estaing は、フランス第20代大統領。

(73)Républicains Indépendants は、フランスに存在したリベラル保守政党。

(74)the Union de Gauche, Union de la gauche は、1972年から1977年にかけての、社会党、左翼急進党、フランス共産党の選挙連合を指す。1977年以降も、政党は変わったが選挙連合が結成された。

(75)『リバタリアン』第4号掲載の「リバタリアン左派運動入門」の記事のタイトルは、「左派リバタリアン運動入門」の誤りだったことをお詫びします。

(76)Jarret B. Wollstein は、個人的自由協会の設立者。ライター。

(77)Actually Existing Capitalism は、資本主義経済が、実際には民間企業と国家との間に、国家介入とパートナーシップがあると主張されるときに使用される言葉。

(78)worthless heirs は、アメリカにおいて、相続権を剥奪された者を指す。

(79)New Democratic Party は、カナダの中道左派・社会民主主義政党。

(80)Victor Koman は、アメリカのSF作家、アゴリスト。

(81)Christopher Ronald Tame は、イギリスのリバタリアン活動家。イギリスのリバタリアン連合の創設者。Altanative Bookshops の設立者。

(82)Erwin S. Strauss は、アメリカの作家、SFファン。

(83)White Market は、Black Market に対置される概念で、国家肯定的な経済活動を指す。

(84)Free Nation Foundation は、1993年から2001年まで活動していたリバタリアン・シンクタンク。Richard O. Hammer の“TAWARD A FREE NATION”によると、政府による侵害が増えている現状に対して、自分たち自身で国を築くべきだ、と主張している (Hammer 1993)。http://freenation.org/toward.html (最終確認: 2023/7/8, 1:29)

(85)Black Bloc はデモの戦術の1つ。参加者が黒色の衣装(服・帽子・サングラス等)を着用する抗議活動。参加者の個人(情報)の特定を困難にし、連帯感を高める効果があるとされる。アナキストがよく用いる。

(86)apparatchiki は、ソ連の指導層のうち、党機関出身官僚を指す。テクノクラートに対置されることが多く、アパラチキはイデオロギーの一貫を志す。

(87)Jello Biafra は、アメリカのミュージシャン、活動家。アメリカ緑の党のメンバー。

(88)Ralph Nader は、アメリカの環境保護活動家、作家、弁護士。

(89)Nobody for President は、1976年、80年、84年、88年の大統領選挙のパロディキャンペーン。「誰もいない」を大統領候補に氏名したとされる。

訳者後記

「コンキンとのインタビュー」は今回にて終了となります。次号にて訳者による簡単な解説を掲載する予定です。大変ありがとうございました。

リバタリアン協会からのお知らせ



●リバタリアン協会ホームページのQRコードです。

●リバタリアン協会twitterアカウントのQRコードです。



訳 国家社会主義とアナーキズム

はじめに

本稿は個人主義的無政府主義者であるベンジャミン・R・タッカー Benjamin R. Tucker による State Socialism and Anarchism : HOW FAR THEY AGREE, AND WHEREIN THEY DIFFER(1888) の翻訳記事である。翻訳にあたってはモリナリ研究所 MOLINARI INSTITUTEに公開されているもの(1)を原本とした。元の文章やホームページには著作権保護の表示がない。

私には翻訳の経験がほぼ無く、訳文は文字通り「拙訳」となっている点をご了承願いたい。おそらく誤訳もある。無断で改訳・転載していただいても構わない。訳註は〔〕で囲ってある一訳し方に困ったのでそうしてある場合が多い。丸括弧は原文のものである。分かりやすいように句読点の位置を変えたり、挿入句「一」を用いたり、節を分けた箇所がある。

ちょっとした解説

タッカーは、無政府資本主義を提唱したマレー・ロスバードに影響を与えている。ロスバードは、例えば「リバタリアンは「アナキスト」か」(阿奈城なき訳)において、リバタリアンとアナキストは異なるとしながらも、「個人主義的アナキストは、リバタリアン思想に多大な貢献をしてきたのである。彼らは、個人主義や反国家統制主義について、これまでに書かれたもののなかで最も優れた意見をいくつか発表してきた。政治的な領域では、個人主義的アナキストは、概して健全なリバタリアンであった。(2)」と述べ、個人主義的無政府主義を高く評価した。と同時に、「しかしながら、政治的な失敗が小さかったのとは対照的に、経済的には深刻な誤りに陥った。彼らは、貨幣供給量への人為的とされる制限のために、利子と利潤が搾取から生じると信じていた。国家とその金融規制が撤廃され、自由銀行が設立されれば、誰もが必要なだけ貨幣を発行することができ、利子と利潤はゼロになるだろうと信じていたのである。フランス人のプルドンから得たこのハイパーインフレの思想は、経済的にはナンセンスである。(2)」と批判した。

リンク

(1) <https://praxeology.net/BT-SSA.htm>

(2) Rothbard, Murray (2022) "Are Libertarians "Anarchists"?" Mises Institute. 阿奈城なき訳 (2023) 「リバタリアンは「アナキスト」か」『リバタリアン』第4号, p. 6.

(中条やばみ)

~~~~~

「国家社会主義とアナーキズム :  
両者はどこまで意見を同じくし、どこで異なるのか(1888)」  
by Benjamin R. Tucker(1854-1939)

おそらく、敵対する人々や無関心な人々だけでなく、好意的な人々や支持者自身の大部分にさえも全く理解されないか誤解されていると同時に、現代社会主義よりも多数の新メンバー及び影響範囲をこれほどまでに獲得した抗議運動〔agitation〕は、今までの歴史で存在しないだろう。この不幸にして非常に危険な状態は、部分的には、この運動一仮に、こんなに混沌としたものを運動と呼べるなら一が変革しようとしている人間関係〔the human relationship〕が、特殊のまたは諸々の階級〔special class or classes〕ではなく、文字通り全人類を巻き込んでいる〔involve〕という事実に起因する。ま

た、これらの人間関係が、特殊的〔special〕改革が求められてきた人間関係よりも、限りなく多様で複雑な性質を持つという事実にも起因する。また、社会を形成する大きな力、つまり情報と啓蒙の経路が、労働者が自分自身を所有すべきだ〔labor should be put in possession of its own あるいは、労働者は労働それ自体を所有すべきだ〕という社会主義の根本的な主張と相反する、直接的な金銭的利益をもつ人々のほとんど排他的な支配下にあるという事実にも起因する。

社会主義の意義、原理、目的をおおよそでも理解していると言えるのは、社会主義勢力における両翼の過激派〔extreme wings〕の指導者達と、おそらくは一部の金の亡者〔the money kings〕達だけである。最近、説教師や教授、三流記者の間で、このテーマを扱うのがすっかり流行になっているが、その大部分が悲惨な仕事であり、判断能力がある人の嘲笑と憐憫を買っている。中間派の〔intermediate どっちつかずな〕社会主義部門の著名人達が、自分たちが何をしようとしているのかを十分に理解していないのは、彼らが占める立場を見れば明らかである。もし彼らがそれを理解しているならば、そして彼らが首尾一貫した論理的思考をするなら、フランスで言うところの結果主義者であったなら、彼らの理性はとっくにどちらかの極端に駆り立てられていただろう。

というのも、現在検討している巨大勢力の両極端〔the two extremes of the vast army〕は一上で暗示したように一労働者が自分自身〔あるいは、自らの労働〕を所有すべきだと言う主張が共通しているにもかかわらず、片方の極〔either〕が共通の敵である既存の社会に反対する場合よりも、社会的行動の基本原則と目的達成の方法が〔両者の間で〕互いに全く正反対である、という奇妙な事実があるからである。両者は2つの原理に基づいている。今日までのあらゆる社会の歴史は、階級闘争の歴史である。既存の社会を擁護する者も含む全ての間派は、両者の妥協によって成り立っている。事物を支配する秩序に対する知的で根深い反抗は、両極のどちらか一方から来なければならないことは明らかである。というのも、それ以外に源泉を持つものは、革命家の精神からほど遠く、表面的な修正に過ぎないので、現代社会主義に現在寄せられている注目や関心を、それ自体の上に全く集中出来ないのだ。

ここで言う2つの原則とは権威と自由であり、そのどちらか一方を完全かつ無条件に代表する社会主義思想の二つの学派の名は、それぞれ、国家社会主義とアナーキズムと呼ぶ。この2学派が何を望み、どのような手段でそれを成そうとしているかを知る者は、社会主義運動を理解する。ローマと理性との間に妥協がないと言われてきたように、国家社会主義とアナーキズムとの間に妥協はないと言えるかもしれない。事実、社会主義勢力の中道から2つの潮流がどんどんと溢れ出てきており、左右に濃縮されている。社会主義が勝利しようとするのであれば、この運動の分離が完了し、既存の秩序が粉碎されたとしても、両陣営において極限的でより苦しい対立に発展する可能性がある。その場合、全ての8時間労働者、全ての労働組合主義者、全ての労働騎士団、全ての土地国有化主義者、全てのグリーンバックャー〔greenbackers 紙幣の流通量の削減に反対する人々〕、要するに、労働者大軍団〔the great army of Labor〕に属する千差万別のメンバー全員が、以前の立場を放棄し、一方と他方に整列し、大戦〔the great battle〕が始まるだろう。国家社会主義者の最終的勝利が何を意味するのか、アナーキストの最終的勝利が何を意味するのか、それを簡潔に述べるのが本項の目的である。

しかし、これを知的に行うには、まず両者に共通する基盤、つまり社会主義者を社会主義者たらしめている特徴を説明しなければならない。

現代社会主義の経済原則は、アダム・スミスが『国富論』の序章で打ち立てた原則から論理的に導かれたものである一すなわち労働こそが価格の真の尺度であるという原則である。しかし、アダム・スミスは、この原則を最も明確かつ簡潔に述べた後、すぐにそれ以

上の考察を放棄し、実際に価格を測定しているのは何か、そしてそれによって、現在の富がどのように分配されているかを示すことに専念した。彼の時代以来、ほとんどすべての政治経済学者は、彼の例に倣い、自身の役割を、工業的・商業的段階における、あるがままの社会の記述に限定してきた。それに対して社会主義は、その役割を、あるべき社会の記述と、あるべき社会にするための手段の発見に拡張した。スミスが上記の原則を発表してから半世紀以上経って、社会主義はスミスが落としかつたところを拾い上げ、その〔原則の〕論理的結論に従うことで、新しい経済哲学の基礎とした。

3つの異なる言語の、3つの異なる国籍の、3人の異なる人物がこれ〔社会主義経済哲学の発展〕を独自に行ったようである。その3人とは、アメリカ人のジョサイア・ウォーレン、フランス人のピエール・J・プルドン、ドイツ系ユダヤ人のカール・マルクスである。ウォーレンとプルドンが単独で誰の助けも借りずに結論に至ったことは確かだが、マルクスの経済思想の大部分がプルドンのおかげだった疑問がある。しかし、マルクスが提示した思想は多くの点で独自のものだったのだから、彼が独創的であると評価されるのは当然のことだろう。この興味深いトリオの仕事がほぼ同時に行われたことは、社会主義が広まっていたこと〔in the air〕、そして、この新しい学派の出現のための機が熟して好条件が整っていたことを示すように思われる。時間によって順位をつける場合に限っては、この功績はアメリカ人のウォーレンに功績があるように思われる—このこと〔アメリカ人が先んじて現代社会主義を発展させたこと〕は、社会主義を輸入品だと非難することを好む煽動家にとって、注目すべき事実である。彼もまた生粋の革命家の血を継ぐ者である、バンカー・ヒルで戦死したウォーレンの子孫だからだ。

労働が価値の真の尺度であるというスミスの原則から—あるいはウォーレンが言ったように、原価が価格の適切な限界であるという原則から—この3人は以下のような推論を行った。労働の自然な賃金はその生産物である。この賃金、つまり生産物こそが唯一の正当な収入源である（もちろん、贈与や相続などは除く。）他の源泉から所得を得る者は全て、直接的あるいは間接的に、自然で正当な労働の対価を窃盗している。この窃盗の過程は、一般的に3つのうちの1つの形態をとる—利子、地代、そして利潤である。この3つは暴利〔usury〕の三位一体を構成し、資本の使用のための貢物〔tribute〕を徴収する方法が異なるに過ぎない。資本とは既にその報酬を完全に受け取った労働〔の残余〕を蓄積したものに過ぎず、労働こそが価格の唯一の基礎であるという原則に基づき、資本の利用は無償であるべきである。資本の貸し手は、資本をそのまま返してもらう資格があるが、それ以上を受け取る資格はない。銀行家、株主、地主、製造業者、商人が労働者から暴利〔usury〕を取り立てることが可能なのは、単に合法的特権、すなわち独占によって支えられているという事実に基づいているに過ぎない。労働者がその生産物全体、すなわち自然な賃金、を享受できるようにする方法は、独占を打破する以外にない。

ウォーレン、プルドン、マルクスの誰かが、正確に上記の言い回しを用いたとか、正確にこの思想に従ったと推定してはならない。しかし、3人が採った基本的な立場と、彼らに共通する範囲の実質的な思想をじゅうぶん明確に表している。そして、私が3人の立場や主張を誤って述べていると非難されるといけないから、あらかじめ申し上げておいた方が良くかもしれない。私は彼らを大雑把に検討したこと、そして、比較と対照を鋭く、鮮明に、強調するために、彼らの思想を私独自の順序や言い回しを用いて、かなり自由にアレンジしている。しかし、そうすることによって、本質的な部分で彼らを誤って表現することはないと私は信じる。

両者の道を分けることになったのは、独占を打破する必要性に迫られたこの時点である。ここで道は別れた。右か左か、権威の道か自由の道か、どちらの道に進むべきか、彼らは理解した。マルクスは一方の道を進み、ウォーレンとプルドンはもう一方の道を進んだ。こうして国家社会主義とアナキズムが生まれた。

まずは国家社会主義。これは、個人の選択に関係なく、人間のあらゆる問題は政府によって管理されるべきだという教義だ、と説明できるかもしれない〔太字は原文イタリック〕。その創始者であるマルクスは、全ての産業と商業の利益、全ての生産と流通の機関を、国家の手にある巨大な独占期間に集中させ統合することが、階級的独占を廃止するための唯一の方法だと結論づけた。政府は、銀行家、製造業者、農民、運送業者、商人にならなければならない、これらの能力において、いかなる競争も許してはならない。土地、道具、あらゆる生産手段を個人の手から奪い取り、集団の所有物としなければならない。個人が所有できるのは、消費される生産物だけであって、それを生産する手段ではない。人間は、自分の衣服や食料を所有することはできるが、自分のシャツを作るミシンや、ジャガイモを掘る鋤を所有することはできない。生産物と資本は本質的に異なるものであり、前者は個人に帰属し、後者は社会に帰属する。社会は、できることなら投票によって、必要であれば革命によって、自分たちのものである資本を奪い取らなければならない。いったん資本を手に入れたら、多数決原理に基づいてそれを管理し、その機関である国家は、生産と流通に資本を利用し、すべての価格を労働の量によって決定し、全人民をその作業場、農場、店舗などで雇用しなければならない。国家は巨大な官僚機構に変身し、すべての個人は国家公務員に変身しなければならない。すべてのことはコスト原則〔the cost principle〕に基づいて行われなければならない。国民は自ら利益を上げる動機を持たない。個人が資本を所有することは許されず、誰も他人を雇用することはできないし、自分自身を雇用することもできない。すべての人は賃金を受け取る者となり、国が唯一の賃金を支払う者となる。国家のために働こうとしない者は飢えなければならない、刑務所に入れられる可能性も高い。貿易の自由はすべて失われる。競争は完全に一掃されなければならない。すべての産業と商業活動は、巨大で包括的な独占企業1社に集中しなければならない。独占に対する治療法は独占である。

これが、カール・マルクス〔の思想〕から採用された、国家社会主義の経済プログラムである。その成長と進歩の歴史は、ここで語ることはできない。この国でこれを支持する政党は、カール・マルクスに従うふりをする社会主義労働党、エドワード・ベラミーを通してろ過されたカール・マルクスに従う国民党、イエス・キリストを通してろ過されたカール・マルクスに従うキリスト教社会主義者として知られている。

この「権威」の原則が、ひとたび経済分野で採用されれば、他にどのような応用が展開されるかは明白である。それは、すべての個人の行動を多数派が絶対的に統制することを意味する。国家社会主義者たちはこのような統制の権利をすでに認めているが、彼らは実のところ、個人は現在享受しているよりもはるかに大きな自由が与えられるだろうと主張している。しかし、個人はそれを許されるだけで、自分のものとして主張することはできない。可能な限り大きな自由を保証された平等の上に、社会が成り立つことはないだろう。存在し得る自由は、苦しみにによって存在し、いつでも奪われる可能性がある。憲法の保障は何の役にも立たない。国家社会主義国の憲法には、一つの条文しかない。すなわち「多数派の権利は絶対である。」

しかし、個人の生活のより親密で私的な関係においてこの権利が行使されることはないだろう、という国家社会主義者の主張は、政府の歴史によって裏付けられるものではない。権力は常に、自身に権力を追加し、その領域を拡大し、権力に設定された限界を超えて侵犯する傾向がある—そして、そのような侵犯に抵抗する習慣が育たず、個人が自分の権利を奪われないようにすることを教わらなかった場合、個性は次第に失われ、政府や国家がすべてになってしまう。管理には当然責任が伴う。したがって、個人の健康、富、知力に対して共同体が責任を負うという国家社会主義の制度の下では、共同体が、その多数決的な表現を通じて、健康、富、知力の条件を規定することをますます主張するようになることは明らかであり、その



結果、個人の自立性が損なわれ、ついには個人の責任感も破壊されてしまう。

国家社会主義者が何を主張しようが、何を否定しようが、彼らの制度を採用すれば〔以下のような制度に〕行き着く運命にある。国家宗教〔a State religion〕はすべての人に費用の拠出させ、全ての人はその祭壇に跪かなければならない。国家医学校〔a State school of medicine〕の医者〔のみ〕が必ず病人を治療しなければならない。国家衛生制度〔a State system of hygiene〕が、何を食べ、何を飲み、何を身につけ、何をしなければならないか、何をしておかないかを規定する。国家倫理規定〔a State code of morals〕は犯罪を罰するだけでは飽き足らず、多数派が悪徳だと決定した事柄を禁止する。国家教育制度〔a State system of instruction〕は全ての私立学校、学園、大学を廃止する。国家保育所〔a State nursery〕によって、全ての子供は、公費で、共同で育てられなければならない。そして最後に、国家家族制度〔a State family〕は優生学、化学的繁殖を試みる。この制度では、国家が子供を作るとを禁止すれば、男女は子供を作るとを許されず、国家が子供を作るとを命じれば、男女は子供を作るとを拒否できない。こうして、権威は絶頂に達し、独占はその最高権力に達するのである。

これが論理的な国家社会主義者の理想であり、カール・マルクスが歩んだ道の先にあるゴールである。では、もう一方の道—自由の道—を歩んだウォーレンとプルドンの運命を追ってみよう。

〔自由の道は〕我々をアナーキズムへと誘う。アナーキズムとは、人間のあらゆる問題は諸個人〔individuals〕または自発的〔voluntary〕な団体によって管理されるべきであり、国家は廃止されるべきだという教義である、と説明できるかもしれない〔太字は原文イタリック〕。

ウォーレンとプルドンは、労働者の正義を追求する過程で、階級的独占という障害に直面した。そのとき、彼らは、これらの独占が権威の上に成り立っていることを見抜いた。なすべきことは、この権威を強化し独占を普遍化することではなく、独占の対極にある競争を普遍化することによって権威を完全に根絶し、反対の原理である自由に完全に振り切れること〔to give full sway to〕であると結論づけた。彼らは競争に、生産にかかる労働コストに対する価格の偉大な平準化機能を見出した。この点で、彼らは政治経済学者と一致した。そのとき、なぜすべての価格が労働コストまで下がらないのか、という疑問が自然に湧いてきた—労働以外の方法で収入を得る余地がどこにあるのか、一言で言えば、利子、家賃、利潤の受け手である使用者がなぜ存在するのか？その答えは、現在の一方的な競争にあった。資本が法律を巧みに操り、生産的労働力の供給において無制限の競争を認めているため、賃金が餓死寸前まで、あるいは現実的に可能な限りそれに近いところまで引き下げられていることがわかったのだ。また、配分労働力〔distributive labor〕、すなわち商業階級の労働力の供給においては、多くの競争が認められており、その結果、商品の価格ではなく、商人の実際の利潤が、商人の労働に対する公平な賃金にいくらか近いところまで抑えられている。しかし、生産的労働も分配的労働も、その達成力を資本に依存しているため、資本を供給する際には、ほとんどまったく競争不可能であり、その結果、貨幣の利子率、家屋家賃や地代家賃は、人民の必需品が耐えられるだけ高い水準に保たれている。

これを知ったウォーレンとプルドンは、政治経済学者たちが自分たちの教義を恐れていると非難した。マンチェスターの人々は一貫性がないと非難された。彼らは、賃金を引き下げるために労働者と競争する自由は信じたが、暴利〔usury〕を引き下げるために資本家と競争する自由は信じなかった。自由放任主義は、労働者であるガチョウ〔the goose〕には非常に良い味付け〔sauce〕であったが、資本家であるガチョウ〔the gander〕には非常に悪い味付け〔sauce〕であった。しかし、この矛盾をどう修正するか、どうすればこの味付け〔sauce〕でこのガチョウを提供できるか、どうすれば資本をピ

ジネスマンや労働者にコスト負担なく、あるいは暴利〔usury〕無しで提供できるか—それが問題だった。

これまで見てきたように、マルクスは資本と生産物が異なるものであると宣言し、資本は社会に属するものであり、社会がこれを掌握し、すべての人の利益のために使用されるべきであると主張することによって、この問題を解決した。プルドンは、資本と生産物のこの区別を嘲笑した。プルドンの主張〔するところによれば以下の通りである〕。資本と生産物は異なる種類の富ではなく、同じ富の単なる代替的な条件や機能であると主張した。資本と生産物は異なる種類の富ではなく、単に同じ富の代替的な条件や機能にすぎない。全ての富は、資本から生産物へ、そして生産物から資本へと絶え間ない変化を遂げ、その過程は際限なく繰り返される。資本と生産物は、純粋に社会的な用語である。ある人にとっては生産物であっても、別の人にとってはすぐに資本となり、その逆もまた然りである。もし世界に一人しか人間がいなければ、すべての富はその人にとって資本であり生産物である。Aの労働の果実〔the fruit of A's toil〕は彼の生産物であり、それがBに売られると、Bの資本となる（ただし、Bが非生産的な消費者である場合は別である。その例は、社会経済の視野から外れた、単なる浪費された富にすぎない）。蒸気機関はコートと同じように生産物であり、コートは蒸気機関と同じように資本である。一方を所有することも、他方を所有することも、同じ衡平法則〔the same laws of equity〕が支配する。

これらの理由や他の理由から、プルドンとウォーレンは、社会による資本の収用〔seizure〕などという計画を認めることはできないと気づいた。しかし、資本の所有権を社会化することには反対であったが、それにもかかわらず、資本の利用を、少数者を富ませるために多数者を貧しくする手段ではなく、万人にとって有益なものにすることによって、その効果を社会化することを目指した。そして、彼らに光明が差し込んだ。資本を競争という自然法〔the natural law of competition〕に従わせることで、資本自身の使用価格を費用にまで引き下げようとする—つまり、資本を取り扱い、移転するために付随する経費を超えるものがないようにする—ことによって、これが可能になることがわかった。そこで彼らは絶対自由貿易の旗印—国内と同様に外国との自由貿易、マンチェスターの教義の論理的実行、レッセフェールという普遍的ルールを掲げた。この旗印の下で、国家社会主義者の全面的独占であれ、現在優勢な様々な階級的独占であれ、独占との戦いを開始した。

後者のうち、彼らは4つの主要かつ重要なものを区別した—貨幣独占、土地独占、関税独占、特許独占〔the money monopoly, the land monopoly, the tariff monopoly, and the patent monopoly〕である。

第一に重要な、彼らが貨幣独占と見做した弊害は、特定の諸個人—すなわち、特定の財産を持つ諸個人—に対して与えられる政府による特権—すなわち、流通媒体〔貨幣〕の発行という特権—に依る。この特権は、現在この国では、流通媒体を供給しようとする他のすべての者に課される10%の国税と、通貨として紙幣を発行することを犯罪とする州法によって強制されている。彼らが主張するところでは、この特権の所有者は、利子率、家屋や建物の家賃率、商品の価格を支配している—直接的には利子率によって、間接的には地代と商品価格によって。というのも、プルドンやウォーレンに言わせれば、銀行業を万人に自由にすれば、ますます多くの人が銀行業に参入し、競争が激しくなり、貸出価格が〔貸出にかかる〕労働の必要経費（統計によれば3/4以下）にまで低下するだろうからだ。そうならば、現在、事業を開始・継続するのに必要な資金を調達するために支払わなければならない破滅的な高率のために、事業への参入を躊躇している何千人もの人々は、その困難が取り除かれることに気づくだろう。売却してお金に換えたくない不動産があれば、銀行はそれを担保に、〔その不動産の〕市場価格の一定割合を1%未満の割引率〔利率〕で融資するだろう。財産はなくとも勤勉で正直で

有能であれば、一般的に、彼らは、既知の支払い能力のある十分な数の関係者たちによって裏書きされた、個人的な覚書を得ることができるだろう—そして、その手形を使えば、彼らは、銀行で同様の条件で融資を受けることができるだろう。かくして、利子は一挙に低下するだろう。その銀行は、資本を貸し出すのではなく、顧客の資本によって事業を行うだろう。その事業とはつまり、銀行の一般的に知られており広く通用する信用 [credits] を、あまり知られておらず利用不可能な—しかし同じくらい良い—信用とを交換すること、そして、資本の利用料としてではなく、銀行を経営する労働者のために支払われる1%未満の料金からなる事業である。この資本取得の容易性は、前代未聞の推進力を事業に与え、前例がないほどの労働力への需要を作り出すだろう—現状の労働市場とは正反対に、需要は供給を常に上回るだろう。そうなれば、リチャード・コブデンの「2人の労働者が1人の雇用者を求める場合には賃金が下落し、2人の使用者が1人の労働者を求める場合、賃金は上昇する」という言葉の実例が見られるだろう。そのとき、労働者が賃金を決定づける立場になり、その結果、本来の賃金、すなわち生産物全体を確保することができる。このようにして、利息を引き下げると同じ打撃が、賃金を引き上げるのである。しかし、それだけではない。利潤も低下するだろう。商人は、掛け値で高く買う代わりに [buying at high price on credit]、銀行で1%未満で金を借り、現金で安価で購入し、顧客に売る商品の価格をそれ相応に引き下げるだろう。では、残る家賃の話に移ろう。自分の家を建てるための資金を1%で借りられる人は、それ以上の家賃を地主に支払うことに同意しないだろう。このように、プルドンやウォーレンは、貨幣独占の単独廃止がもたらす結果について、膨大な主張を展開している。

第二に重要なのは土地独占である—そして、その弊害は、専らアイルランドのような農業国において見られる。この独占は、個人の占有と耕作に基づかない土地の所有権を政府が強制することに依る。ウォーレンやプルドンにとって、個人主義者が、仲間から、土地の個人的占有と耕作以外のあらゆる方法で保護されなくなるやいなや [つまり、土地を保護する方法が個人的所有や耕作のみによるのであれば]、地代が消滅し、その結果、暴利 [usury] の足が一本少なくなることは明らかであった。今日の彼らの支持者たちは、この主張を修正し、独占に依るのではなく、土壌や土地の優劣に依る地代の機能は、自由の条件下では常に最小になる傾向にあるとはいえ、一時的には、そしておそらくは永久に、ごくわずかには存在し続けるだろうと認めている。しかし、土地にかかる実利的な [economic] 地代を生じさせる土壌の不平等は、能力の実利的な地代を生じさせる人間の技能の不平等と同様、暴利 [usury] に最も徹底して反対する者にとっても、深刻な憂慮の念を抱かせるものではない。なぜなら、その性質は、その他のより危険な不平等がそこから生じる起源のようなものではなく、むしろ、最終的には枯れて倒れる朽ちた枝のようなものだからである。

第三に、関税独占である。これは、低価格で有利な条件のもとでの生産をひいきにしている人々に課税という刑罰を科すことによって、高価格で不向きな条件下での生産を助長することに依る。この独占がもたらす弊害は、暴利 [usury] というよりも、むしろ暴利損失 [misusury おそらく造語、機会損失的な意味合い] と呼ぶ方が適切かもしれない。というのも、この独占は、資本の使用に対してではなく、むしろ資本の誤用に対して、労働者に支払いを強いるからである。この独占の廃止は、課税されるすべての物品の価格の大幅な引き下げをもたらす、これらの物品を消費する労働者にとってのこの節約は、労働者にとっての自然な賃金、すなわち労働の成果全体を確保するためのもう一つのステップとなるであろう。しかし、プルドンは、貨幣独占を廃止する前にこの独占を廃止することは、残酷で悲惨な政策であると認めた。第一に、貨幣独占によって生じる貨幣の欠乏の弊害は、輸入が輸出を上回ることによって生じる国外への貨幣の流出によって、いっそう強まるからである。第二に、現在保護産業に従事している労働者のうちの少数は、競争的な貨幣

制度が生み出す飽くなき労働需要の恩恵にあずかることなく、飢餓に直面して路頭に迷うことになるからである。国内における貨幣の自由貿易は、貨幣と労働を豊かにするものであり、プルドンによって、外国との商品の自由貿易の先行条件として主張された。

第四に、特許独占である。これは、発明者や著作者を、その役務の労働対価を莫大に上回る報酬を国民から強要するのに十分な期間、競争から保護することに依る。言い換えれば、特定の人々に、自然の法則や事実に対する財産権を数年間与え、この自然の富を利用するために他人から年貢を取り立てる権力を与えることである。この独占を廃止すれば、その受益者は競争に対する健全な恐怖で満たされ、他の労働者が得るのと同等の報酬で満足するようになる。そして、その製品や作品を、その事業分野が他のどの分野よりも競争相手にとって魅力的でないほど低い価格で [過剰な価格ではなく、最低限の独占価格で]、最初に市場に投入することによって、その報酬を確保するようになるだろう。

このような独占を破壊し、その代わりに最も自由な競争をさせるという経済綱領の発展によって、その著者たちは、自分たちの思想のすべてが、個人の自由—つまり、自分自身、自分の生産物、自分の個人的な問題に対する統治権、外部の権威の命令に対する反抗—という、非常に基本的な原則の上に成り立っているという事実を認識するようになった。資本を個人から取り上げて政府に与えるという考え方が、マルクスを、政府をすべてにして個人を無にすることに帰結する道に進ませたように、政府に保護された独占企業から資本を取り上げ、すべての個人の手の届くところに資本を置くという考え方が、ウォーレンとプルドンを、個人をすべてにして政府を無にすることに終始する道に進ませた。もし個人が自らを統治する権利を持つのであれば、全ての外的 [external] 政府は専制である。したがって、国家を廃止する必要がある。これが、ウォーレンとプルドンが迫られた論理的結論であり、彼らの政治哲学の基本的な条項となった。プルドンがアン=アーキズムと名付けたこの教義は、ギリシャ語に由来する言葉で、一般に考えられているような秩序の不在ではなく、支配の不在を意味する。アナキストは単に、恐れることないジェファソン的民主政の支持者である [The Anarchists are simply unterrified Jeffersonian Democrats]。彼らは「最良の政府とは最小の政府である」と信じており、最小の政府とはまったく政府を持たないことである。個人と財産の保護という単純な警察機能でさえ、強制課税によって支えられる政府に与えることを、彼らは否定する。保護は、それが必要な限り、自主的な結社と自衛のための協力によって確保されるべきもの、あるいは、他の商品と同じように、最良の商品を最低の価格で提供する者から購入されるべき商品と見なす。彼らに言わせれば、侵略に対する、本人が求めてもいないし、望んでもいない保護に、支払いや我慢 [to suffer] を強制すること自体が、個人に対する侵略なのである。さらに彼らは、彼らの経済計画の実現によって貧困が消滅し、その結果、犯罪が消滅した後、保護は市場における麻薬になると主張する。彼らにとって、強制的な課税はすべての独占企業の生命線である。徴税人に対する受動的な、しかし組織的な抵抗は、適切な時期が来れば、彼らの目的を達成する最も効果的な方法の一つとして考えられている。

この点に関する彼らの態度は、政治的あるいは社会的な性質を持つ他のすべての問題に対する彼らの態度の鍵となる。宗教に関する限り、彼らは無神論的だった。なぜなら、神の権威と道徳の宗教的制裁を、特権階級が人間の権威を行使するために提唱される、主要な口実とみなしているからである。「神が存在するとすれば、それは人間の敵である」とプルドンは言った。そして、ヴォルテールの有名なエピグラム「もし神が存在しなければ、神を発明する必要があるだろう」とは対照的に、ロシアの偉大なニヒリスト、ミハイル・バクーニンが、このような反語的な命題を掲げた。「もし神が存在するならば、神を廃絶する必要がある。」しかし、神のヒエラル

キーをアナーキーと矛盾するものとみなし、彼らはそれを信じないが、アナーキストはそれを信じる自由を固く信じている。信教の自由を否定するものには真っ向から反対する。

このように、各個人が自分の神父になる権利、あるいは自分の神父を選ぶ権利を支持し、同様に、各個人が自分の医者になる権利、あるいは自分の医者を選ぶ権利も支持する。神学の独占なくして、医学の独占なし。競争は、常に、どこにでも、存在する一霊的な助言も医学的な助言も、それぞれの長所によって〔それが役に立つか否かによって〕立つか倒れるかが決まる。医学のみならず健康の問題〔hygiene〕においても、この自由の原則に従わなければならない。個人は、健康になるために何をすべきかだけでなく、健康を維持するために何をすべきかを自分で決めることができる。何を食べなければならないか、飲まなければならないか、着てはならないか、すべきでないか—そして、何をすべきか—を、外部のいかなる権力も彼に指図してはならない。

アナーキズム的スキームには、個人に課すべき道德規範もない。「放っておいてくれ〔Mind your own business〕」というのが、アナーキズムの唯一の道德律である。他人の事柄〔business〕に干渉することは犯罪であり、唯一の犯罪である—それゆえ適切に抵抗されるようなものである。アナーキストは、この考えに従って、悪を独断的に抑圧しようとする試みそのものを犯罪とみなす。彼らは、自由とその結果としての社会的幸福が、すべての悪徳を確実に治すと信じている。しかし、酒飲み、ギャンブラー、放蕩者、娼婦が、自由にそれを捨てることを選ぶまで、その生活を送る権利は認める。アナーキストは、子供の扶養・養育に関して、国家社会主義者が好んでいる共産主義的な保育所を設立することも、現在普及している共産主義的な学校制度を維持することもしない。保母や教師は、医者や伝道師のように、自発的に選ばれなければならない、そのサービスは、彼らをひいきにする〔patoronize〕人々によって支払われなければならない。親の権利は奪われてはならないし、親の責任は他人に押し付けられてはならない。

男女関係のようなデリケートな問題であっても、アナーキストはその原則の適用をためらわない。彼らは、どんな男女でも、彼らができる限り、意志する限り、あるいはするかもしれない限り、長期的にであれ短期的にであれ互いに愛し合う権利を認め、擁護する。彼らにとって、法律婚と法的な離婚は等しく不条理なことである。彼らは待ち望むのだ—一男であれ女であれ、すべての個人が自立し、一つの家であれ共同住宅の一室であれ、それぞれが独立した自分の生活空間〔home〕を持つようになるのを—また、これらの独立した個人間の恋愛関係が、個人の傾向や魅力と同じように多様であるようになるのを—そして、これらの関係から生まれた子供が、自己を所有できる年齢になるまで、専ら母親が所有するようになるのを。

これがアナーキズム的社会理想の主な特徴である。理想を実現するための最良の方法については、理想を掲げる人々の間でも意見が大きく分かれている。ここでは、そのような局面を扱うことは時間的に不可能である。アナーキストと偽って自らを名乗りながら、同時に国家社会主義者と同じくらい専制的なアナーキズム体制を提唱する共産主義者の理想と、アナーキズムはまったく矛盾するものである、という事実に注意を喚起するだけである。そして〔例えば〕、それは、クロボトキン王子らを刑務所に送るパーチントン夫人のほうきによって後退させられたのと同じくらい、クロボトキン王子によって前進させられた理想である—シカゴの殉教者たちが生前にアナーキズムの名の下で行った革命的主体としての暴力や新秩序保護装置としての権威といった不適切な〔unfortunate〕主張よりも、彼らが社会主義という共通の大義のために絞首台の上で栄光の死を遂げたことの方が、よっぽど役に立ったような理想である。アナーキストは、目的としても手段としても自由を信じ、それに敵対するいかなるものにも敵対する。

もし私が、アナーキズムの立場から社会主義について、このあま

りにも簡潔な説明を要約することを引き受けるべきでなかったとしたら、フランスの優れたジャーナリストであり歴史家であるアーネスト・レシーニュが、一連の歯切れのよいアンチテーゼという形で、すでに私のためにその仕事を成し遂げてくれていたことに気づかなかったからである—この講義の結びとして、この文章を読んでもいただくことで、私が与えようとしてきた印象をさらに深めていただければ幸いである。

社会主義には2つある

ひとつは共産主義的、もうひとつは連帯的である。一方は独裁的で、もう一方はリバタリアンである。一方は形而上学的で、もう一方は实际的である。一方は独断的で、他方は科学的である。一方は感情的で、他方は深慮的である。一方は破壊的で、他方は建設的である。

両者とも、万人にとって可能な限り最大の福祉を追求している。

一方は万人の幸福を確立することを目的とし、もう一方は各自がそれぞれのやり方で幸福になれるようにすることを目的とする。前者は国家を、特別な本質を持つ、特別な権利を持ち、特別な服従を求めることができる、すべての社会の外側かつ上位にある一種の神の権利の産物である、独特な〔sui generis〕社会とみなす。後者は国家を、他の団体と同じように単なる団体であり、一般的に他の団体よりも愚かなことをする団体と見なす。

前者は国家の統治権を宣言し、後者はいかなる統治権も認めない。

一方はすべての独占が国家によって保有されることを望み、他方はすべての独占の廃止を望む。

一方は被支配階級が支配階級になることを望み、他方は階級の消滅を望む。

両者とも、現在の状態は長続きしないと宣言する。

前者は革命を革命の不可欠な担い手と考え、後者は抑圧だけが革命を革命に変えると説く。

前者は天変地異を信じている。

後者は、社会の進歩は個人の自由な努力によってもたらされることを知っている。

両者とも、我々が新たな歴史的局面を迎えていることを理解している。

一方は、プロレタリア以外は存在しないことを望む。

もう一方は、プロレタリアがいなくなることを望む。

前者は、すべての人からすべてを取り上げようとする。

もう一方は、それぞれが自分のものを所有することを望む。

一方は、すべての人を収奪することを望む。

もう一方は、誰もが所有者となることを望む。

前者は「政府の望むようにせよ」と言う。

もう一方は、「あなた自身が望むようにしなさい」と言う。

前者は専制主義を伴って脅かす。

後者は自由を約束する。

前者は市民を国家に従属させる。

後者は国家を市民の被雇用者とする。

一方は、新しい世界の誕生には労苦が必要だと宣言する。

もう一方は、真の進歩は誰にも苦しみを与えないと宣言する。

前者は、社会戦争に自信を持っている。

もう一方は平和の業だけを信じている。

一方は命令し、規制し、立法することを熱望する。

もう一方は、最低限の命令、規制、立法を実現しようとする。

一方は、最も残虐な反作用に導かれるだろう。

もう一方は進歩への無限の地平を開く。

一方は失敗し、他方は成功する。

どちらも平等を望んでいる。

一方は高すぎる頭を下げることによって。

もう一方は、低すぎる頭を上げることによって。  
 一方は共通のくびきの下に平等を見出す。  
 もう一方は完全な自由によって平等を確保する。  
 一方は不寛容であり、他方は寛容である。  
 一方は怯えさせ、他方は安心させる。  
 一方はすべての人を指導しようとする。  
 もう一方は、誰もが自分自身を律することができるようにすることを望む。  
 前者はすべての人を支えたいと願う。  
 もう一方は、誰もが自分自身を支えられるようになることを望む。  
 一方は言う：  
 土地は国家に。  
 鉱山は国家に。  
 道具は国家に。  
 生産物は国家に。  
 もうひとつはこう言う：  
 土地は耕作者に。  
 鉱山は鉱夫に。  
 道具は労働者に。  
 生産物は生産者に。  
 この2つの社会主義しかない。  
 ひとつは社会主義の幼年期であり、もうひとつはその青年期である。  
 一方はすでに過去であり、他方は未来である。  
 一方は他方にとって代わられる。

今日、私たち一人ひとは、この2つの社会主義のどちらか一方を選ばなければならない。そうでなければ、社会主義者ではないということ曝け出すことになる。

—Ernest Lesigne

Liberty 5.16, no. 120 (10 March 1888), pp. 2-3, 6.

### 追記

前述のエッセイが書かれた40年前には、競争の否定は、現在社会秩序を深刻に脅かしている富の巨大な集中をまだもたらしていなかった。独占政策の逆転によって蓄積の流れを食い止めるには、まだ遅くはなかった。アナキズム的な救済策はまだ適用可能だった。

今日、その道はそれほど明確ではない。4つの独占は、野放図に、トラストの近代的発展を可能にしてきた。トラストは今や、最も自由な銀行制度が制定されたとしても、それを破壊することができないのではないかと私が危惧する怪物である。スタンダード・オイル・グループがわずか5千万ドルしか支配していなかった時代には、自由競争制度は絶望的なまでにこれを機能不全に陥れただろう—貨幣独占がその〔支配の〕維持と成長には必要だったのだ。しかし現在では、直接・間接に、おそらく1億ドルを支配しており、資金独占は確かに便利ではあるが、もはや必要なものではない。それなしでもやっつけていける。銀行業務に対する規制がすべて撤廃されれば、集中した

資本は、あらゆる競争相手をこの分野から排除するような金額を、犠牲のために毎年積み立てることによって、新しい状況にうまく対応することができるだろう。

もしそうだとすれば、独占は、経済的な力によってのみ永続的に制御することができるが、当分の間、彼らの手の届かないところに過ぎ去り、政治的または革命的な力によってのみ、しばらくの間、取り組まなければならない。国家を通じて、あるいは国家に反抗して、強制的な没収の措置が、独占が生み出した集中を廃絶するまで、アナキズムが提案し、前述のページで概説した経済的解決策（それ以外に解決策はない）は、偉大な平準化の後に、その適用に有利な条件が整うように、新進世代に教えるべきものとして残るだろう。しかし、学習とは時間がかかるものであり、あまり急いではならない。国家社会主義や革命の宣伝に加わることで、それを早めようとするアナキストは、実に悲しい間違いを犯す。彼らは、出来事の進行を強引に押し進める手助けをするので、人民は、自分たちの悩みが競争の排除によるものであったことを、自分たちの経験の学習を通じて知る時間がなくなる。この教訓が一時に学ばなければ、過去は将来も繰り返されることになる。その場合、私たちは、慰めを求めて、ニーチェの教義 [the doctrine of Nietzsche that this is bound to happen anyhow]、あるいはルナンの考察—シリウスの地点に立てば、全ての問題はちっぽけなものだ—に、転向 [turn] しなければならないだろう。

B. R. T., August 11, 1926.

(訳：中条やばみ)

## リバタリアン協会からのお知らせ

機関紙『リバタリアン』は、寄稿者の皆様の信念と、読者の皆様のご厚意によって成り立っております。記事の寄稿がなくなると、機関紙は存続出来ません。理論的なこと、実践的なこと、いずれでも構いません。数百時低度の小さな話題でも構いません。皆様の寄稿をお待ちしております。寄稿を希望する方は、協会メールアドレス [info@institute-for-libertarian.org](mailto:info@institute-for-libertarian.org) より、申し出てください。なお、記事の基本的な要件は以下の通りです。

※詳細は希望者に別途お知らせます。

- ・リバタリアン思想・運動に関係する内容であること
- 可：リバタリアン社会主義、無政府資本主義
- ・日本語で書かれていること。ただし、協会が認めた場合はこの限りではない
- ・引用は明記すること
- ・寄稿記事の著作権及び著作者人格権の放棄に同意すること。ただし、寄稿した記事がリバタリアン協会により掲載拒否された場合はこの限りではない
- ・記事はドキュメントファイルにて寄稿すること

### 推薦Webサイト

- ミーゼス研究所 Mises Institute  
ミーゼス研究所は、ロスバードらが創設したアメリカのリバタリアン・オーストリア学派系シンクタンクである。高頻度で更新される記事群のミーゼス・ワイヤーや、ロスバードらの書籍が無料で閲覧できる。研究者・活動家・趣味者のいずれであっても、リバタリアン、オーストリアンにとって便利なサイトである。
- 無国籍社会センター Center for Stateless Society  
無国籍社会センター (C4SS) は、左派リバタリアン思想やアナキズム思想の文献を掲載しているシンクタンクである。ミーゼス研究所が右派リバタリアン筆頭シンクタンクとすれば、無国籍社会センターは左派リバタリアン筆頭と言えるだろう。